

アメリカ元国務長官：ヘンリー・A・キッシンジャーの足跡

幼いころ、一家はすべてを放棄して故国ドイツを出てニューヨークに来た。財産の国外持ち出しは禁じられ、着の身着のままだった。人生において、財産や社会的地位は、はなないものだと知った。

その結果、「自分が心から信ずることを、毎年必ず実行すべきである」との信念を持つにいたった。

キッシンジャー博士は、「冷徹な現実主義者」として知られ、「理想主義者」の対極のごとく描かれる事が多い。

しかし、ことは、そう簡単ではない。理想なき現実主義とは、近視眼の「現状追随」にほかならない。その結果、現実をリードするよりも、現実を引きずられる結果になりかねない。

反対に、現実の冷酷さに目をつぶる理想主義は、理想というよりも空想である。いわば遠視眼の病でもある。近視眼でも遠視眼でもなく、正視眼でなければならぬ。必要なのは「新しい現実」を生み出すことであり、「世界は変えられる」という希望を示すことだからである。それを博士は実現した。

長く続く変化は大部分、徐々に起きたものであるという。行動している当事者はこれに気づかない。

歴史を学ぶことはできるが、今はどの状況と似ているかを理解するには、芸術的ともいえる鋭い感覚を磨かないいけない。ある判断を行うとき、思想、哲学、理念が必要になる。

人間が理解できないさまざまな力の存在があるし、本質的に不可知の部分がある。したがって、人間は常に、畏敬の念と謙虚さを持つ必要がある。

そうした畏敬の念がなければ、国家権力の執行にも歯止めがなくなる。産業社会の結合力も失われ、人間の個性が真に認識されることもない。

多くの世評には表れない人間キッシンジャー博士の奥行きを示す言葉である。